解説

推進工事技士の意義と必要性

北村　雅裕（きたむら　まさひろ）
㈱福田組
東京本店土木部技術部課長
（推進工事技士）

1　推進工事との出会いから資格取得まで

珍しいケースだと思いますが、私にとって最初の推進工事は日本国内ではなく出向赴任先のタイ王国の首都バンコクでした。今から20年以上前のことです。それまで道路工事の経歴しかなかった私ですが、ひょんなことから小規模な推進工事に携わることとなり、仕事を教えてくれる日本人もいなかったので、手探りで自己流の仕事をしていました。数年後に帰国しましたが、次は推進工事専業の子会社へと出向となったのです。

この時点で、私の推進工事についての知識は独学で浅薄なものだったわけですが、これからは対外的にも推進工事の専門家という立場が求められる中で、いよいよ本物の知識と技術の習得に迫られました。これが、私が推進工事技士を取得するきっかけです。

さらに数年後、出向先から親会社に戻って現在に至りますが、専業者時代に数多くの推進工事で、現場を直接指揮する立場で従事する機会に恵まれたことは、現在ゼネコンの職員である私にとっては得難い経験であり、今の私の財産にもなっています。

2　推進工事技士としての知識が生かされた工事

私が携わった工事の中から2例を紹介します。まずひとつは静岡県内の高圧ガス幹線敷設工事です。

工区延長約20kmのほとんどを開削によってガス管を直接埋設するのですが、河川横断など一部区間で推進管をさや管として敷設されます。さや管について発注者側の指定はないので、工法選定からさや管材料、立坑築造方法まで、施工者側で計画して施工します。公益性の高いガス事業ではありますが民間発注工事なので、とにかくコスト優先ですが、施工リスクは施工者側が負うことになります。そのため工事遂行には、最適な推進工法を選定し、状況に見合った立坑や仮設などを計画するための広範な知識と計画能力が要求されます。計画の良否が事業の成否に直結するため、推進工事技士としての能力を遺憾なく発揮できる場であるといえます。当工区では推進部が20スパンあり、推進工法は泥水式と土圧式、立坑築造は鋼矢板、ライナープレート、

写真－1　推進立坑部のガス管敷設状況（400A）